

蜷川シェイクスピアに見るグローバル・シェイクスピアの限界と可能性

和田 哉恵

はじめに

蜷川幸雄（1935-2016）は1985年にEdinburgh Festivalでの『NINAGAWA マクベス』の上演以降、世界に名を轟かせる現代シェイクスピア劇演出家の一人である。蜷川の能や歌舞伎などといった日本伝統芸能、桜や仏壇、ひな壇などといった日本の伝統文化を用いて上演されるシェイクスピア作品は、その多文化横断的性格がゆえ、否定的なものから肯定的なものに至るまで、様々な視点から議論されてきた。だが、1985年の『NINAGAWA マクベス』の海外公演以降の国内外の研究者による蜷川作品の学術批評を収集・調査することにより、大きく分けて3つの傾向があり、1990年代と2000年以降では、研究者の視点に変化が見られることがわかった。また、これまでの蜷川シェイクスピアに対する学術批評の動向から、今後のグローバル・シェイクスピアの可能性と限界についても考察したい。

蜷川幸雄シェイクスピアについて

蜷川幸雄は、1974年に自身初となるシェイクスピア作品、『ロミオとジュリエット』を東京の日生劇場にて上演する。また、1998年から埼玉県彩の国さいたま芸術劇場にて、シェイクスピア作品37作品の上演を目標とする、「彩の国シェイクスピアシリーズ」の初代芸術監督に就任し、2016年の『尺には尺を』の公演に至るまで、シェイクスピア作品32作品の演出を手掛ける。また、海外公演も精力的に行い、1985年にEdinburgh International Festivalにおいて、自身初の海外公演である『NINAGAWA マクベス』を上演する。以降、12作品計30回の海外公演を行った。また日本語作品だけでなく、英語作品の演出にも携わり、1999年には英国RSCとのコラボレーションで『リア王』を、2004年には『ハムレット』を演出した。蜷川の歌舞伎や能、また仏壇や桜などという日本文化が融合したシェイクスピア演出は、現代シェイクスピア・アダプテーションの一つの形態である、異国の伝統芸能を通じて演じられるシェイクスピアの演出「インターカルチュラル・シェイクスピア」¹の一つに分類されている。

蜷川シェイクスピアをめぐる3つの批評傾向

1985年の『NINAGAWA マクベス』の上演以降、国内外の研究者達は蜷川作品に対し、異なる議論を展開してきた。だが、これまで出版された蜷川シェイクスピアに関する批評を精査することによって、蜷川シェイクスピアに対する文学研究者の評価は、時代によって変化を遂げ、そして大きく分けて3つの傾向があることが分かった。1990年代からは2000年初頭に至るまで、研究者たちは蜷川シェイクスピアに対し、否定的な見解を示すものが多かったものの、2000年以降は肯定的に論じている研究が多く見受けられた。また、その視点もシェイクスピア作品の文化的・歴史的背景などに対する忠実さに重きを置く「真正性」を重視したものから、新たなシェイクスピア作品解釈や、英国外でのシェイクスピア受容などといった、シェイクスピアの「多様性」を認める議論へと変化していることがわかった。

1988年から2000年代初頭にかけての蜷川批評の初期傾向として挙げられるのが、作品が原作に忠実であるか、文化の取り扱いが適切であるかを吟味する、「真正性」の観点から蜷川作品を批判的に論じる議論である。そこでは、日本文化を通じて演じられる蜷川シェイクスピアはシェイクスピア作品への「真正性」に欠けるだけでなく、日本の伝統芸能そのものの「真正性」の乏しさに対しても言及している。1988年に初めて蜷川作品についての論文が出版されてから2000年代初めに至るまで、約半分の研究論文がこの観点から論じられてきた。代表的な議論は、喜志哲雄の議論に見られるように、蜷川作品に描かれている「歌舞伎」の様子は、英国の演劇批評家が思うような「伝統的」な歌舞伎もしくは日本の伝統儀式的なものではない(245-50)、また蜷川の視覚的に豪華な演出はシェイクスピア作品における「言葉」の役割を無視した演出である(Kishi, 110-23)というものである。

だが、2000年代半ばに入ると、蜷川作品を肯定的に論じた論文が目立つようである。これらの観点から書かれた論文は1990年代からあったものの、特に2004年以降には増加傾向が見られた。そして、肯定的な議論には大きく分けて2つの傾向に分けることができる。その1つが、蜷川シェイクスピア批評2つ目の傾向である、シェイクスピア作品への新たな解釈・視点に着目し蜷川シェイクスピアを論じている傾向である。代表的な意見は、南隆太の議論のように、日本語の特徴である主語の欠落によって広がるシェイクスピア作品の解釈、また仏壇や桜などの用いた視覚的演出によって新たな解釈を提供することとなったと述べている(n.p.)。そし

て、Bonaventure Ruperti は、そのような蜷川の視覚的な演出がもたらす『マクベス』の新たな解釈が、蜷川のヨーロッパでの成功に繋がったと議論している(138-56)。

またもう一方の肯定的な議論が、3つ目の傾向である、シェイクスピアの受容の歴史や経済状況などから蜷川作品を論じる「マクロ・ヒストリー的」²分析である。Andrea J Nouryeh のように日本文化の再興と日本伝統芸能を用いたシェイクスピア演出の増加の関係性(254-69)、また F.R. Mulryne のように明治時代の日本におけるシェイクスピアの受容や新劇運動、また高度経済成長期後の日本の伝統芸能の再興など文化的背景から蜷川作品の分析などが挙げられる(1-11)。

まとめ

このように、蜷川のシェイクスピア作品は、初期は日本文化やシェイクスピア作品に対する真正性をめぐり、批判的に研究者たちから捉えられていたものの、21世紀にはいると、蜷川演出によって描かれるシェイクスピア作品への新たな解釈や視点や、シェイクスピア作品が、遠く離れた日本において、どのように受容されたのかなどの社会的背景から読み解く作品として肯定的に論じられている傾向があった。今後においては、初期批評はグローバル・シェイクスピアの「限界」として依然機能するも、後者2つの意見が主に台頭し、シェイクスピアの「真正性」をめぐる議論からシェイクスピアの「多様な可能性」に着目する視点へとさらに変化を遂げていくだろう。

註：

1. James Brandon はインターカルチュラル・シェイクスピアを“Visionary Asian directors (and playwrights and actors as well) have created a range of performances of Shakespeare’s plays that are based on confrontation of the textual values of canonical Shakespeare with the immediacy and vitality of indigenous theatre techniques and aesthetics...Local and foreign sources of authority coexist in performance, with neither authority subsuming, or erasing, the other. I call this tentatively ‘intercultural Shakespeare.’” (31)と定義している。
2. Thomas Postlewait によると、「マクロ・ヒストリー」とは“to identify, among the many possible external conditions that may contribute to the event, the primary factors that shaped, directed and perhaps controlled the actions and thoughts of the participants in the event.” (240) する歴史学のメソッドの1つである。

Works Cited:

- Brandon, James. “Other Shakespeare in Asia.” Re-playing Shakespeare in Asia, Edited by Poonam Trivedi and Ryuta Minami, Routledge, 2010, pp. 21-37.
- Kishi, Tetsuo. ““Bless Thee! Thou Art Translated!”: Shakespeare in Japan.” Images of Shakespeare: Proceedings of the Third Congress of the International Shakespeare Association, 1986, edited by Werner Habicht, et al, U of Delaware P, 1988, pp.245-250.
- . “Japanese Shakespeare and English Reviewer.” Shakespeare and the Japanese Stage, edited by Takashi Sasayama, et al, Cambridge UP, 1998, pp.110-123.
- Minami, Ryuta. Macbeth Under the Cherry Trees. 1991. U of Warwick. Unpublished Essay.
- Mulryne, F.R. “Introduction.” Shakespeare and the Japanese Stage, Edited by Takashi Sasayama, et al, Cambridge UP, 1998, pp. 1-11.
- Nouryeh, Andrea J. “Shakespeare and the Japanese Stage.” Foreign Shakespeare, edited by Dennis Kennedy, Cambridge UP, 1993, pp.254-69.
- Postlewait, Thomas. “The Nature of Historical Evidence: A Case Study.” The Cambridge Companion to Theatre History, edited by David Wiles and Christine Dymkowski, Cambridge UP, 2013, pp.231-45.
- Ruperti, Bonaventure. “Greek Tragedy in/and the Productions of Ninagawa Yukio.” Japanese Theatre Transcultural: German and Italian Intertwinings, Edited by Staca Scholz-Cionca and Andreas Regelsberger, Iudicium, 2011, pp.138-56.